

演題 7. 口腔領域扁平上皮癌に対する超選択的カニューレーションによる化学療法

○星 秀樹, 関山 三郎, 杉山 芳樹
柴崎 信, 大平 明範, 船木 聖巳
三沢 肇, 古内 秀幸

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

我々の施設では、これまで口腔領域扁平上皮癌に対して動注、放射線同時併用療法を行ってきた。最近では、さらにその治療効果を高めるため、透視下に腫瘍栄養血管へカニューレを超選択的に挿入し、動注、放射線同時併用療法を行っているので報告した。

方法：通法に従い、局麻下に浅側頭動脈より逆行性にカニューレーションを行い、カニューレの先端を腫瘍栄養血管の分岐部に留置する。次に、透視下にカニューレの先端を腫瘍栄養血管へ超選択的に挿入留置する。超選択的カニューレーション後、BLM, MTX および CDDP の 3 剤併用動注化学療法を放射線療法と併用し行った。放射線療法の併用は 1 キール目の CDDP 持続動注開始とともに開始することを原則とした。

結果：22 例に対して超選択的カニューレーションを行った。部位別では、舌 14 例、下顎歯肉 5 例、頬粘膜 2 例、口底 1 例であった。1987 年 VICC による TNM 分類では、T₁ 5 例、T₂ 10 例、T₃ 2 例、T₄ 5 例であった。Stage 別分類では Stage I 5 例、Stage II 8 例、Stage III 4 例、Stage IV 5 例であった。治療後の臨床効果は CR 19 例であり、CR 率は 86.4% であった。CR 19 例中 17 例については原発巣の再発なく経過している。3 例には頸部後発転移を認め、頸部郭清術を行った。5 年累積生存率は 81.6% であった。

演題 8. 岩手県紫波町における成人歯科保健調査について

○米満 正美, 稲葉 大輔, 岸 光男
阿部 晶子, 相沢 文恵, 染谷 美子

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

公衆歯科保健活動を展開していくためには、その地域の歯科保健状況の把握は必須である。このため、盛岡地域歯科保健連絡協議会は専門部会を設け地域のデータベース作成をめざしている。

1997 年 6 月、紫波町が実施している 20 歳以上を対象とした成人総合健診の流れの中で WHO の診査基準に準拠し、622 名について歯科保健調査を実施した。集計対象者数は 20 代 3 名と 90 代 2 名を除いた 617 名である。結果は以下の通りである。

(1)各年齢階級における一人平均現在歯数は、30 代で 24.4 歯、40 代で 23.7 歯、50 代で 18 歯、60 代で 14.8 歯、70 代で 11.1 歯、80 代で 9.3 歯であった。(2)歯冠部う蝕の未処置歯数は各年代とも平均値で 1 歯以下であり、う蝕の治療はよく行われていた。(3)1 人平均の根面う蝕歯数(未処置歯数と処置歯数の合計)は 30 代で 0.7 歯、40 代で 1.8 歯、50 代で 1.7 歯、60 代で 1.6 歯、70 代で 1.3 歯、80 代で 1.8 歯であった。(4)CPITN の個人最大 Code の分布では、Code 2 (歯石沈着のある者)及び Code 3 (4~5 mm のポケットを有する者)が 30 代、40 代ともに約 70%、50 代で約 60% であった。(5)上下顎無歯顎者率は、50 代で 3.0%、60 代で 6.8%、70 代で 21.6%、80 代で 36.4% であり、増齢とともに急激に増加していた。(6)義歯作成又は修理の必要な者の割合は、30 代で 2.9%、40 代で 20.3%、50 代で 24.4%、60 代で 33.8%、70 代で 36.0%、80 代で 27.3% であった。

これらの結果から、紫波町の成人は平成 5 年度の歯科疾患実態調査と比べて残存歯数が 20 代から 50 代にかけて 2~3 歯少ない状況であった。歯の喪失原因の 2 大疾患であるう蝕と歯周疾患のうち、う蝕に関しては処置がよくなされていたが、歯周疾患は放置されていることが推察された。今後、住民の口腔衛生思想の向上とともに「かかりつけ歯科医」などによる定期管理が重要である。